令和８年度　第１回総合教育会議
議事概要

令和８年９月18日（金）に令和８年度 第１回総合教育会議が開催されました。

第１回総合教育会議の議事概要は別添のとおりです。

令和８年度　第１回福知山市総合教育会議　議事概要

日時　令和８年９月 18 日(金)
午後２時から３時 30 分まで
場所　市民交流プラザふくちやま
会議室 3-2、3-3

■出席者(敬称略)

市長　大橋　一夫
教育長　　廣田　康男
教育委員　塩見　佳扶子、織田　信夫、小林　加奈子、大門　大朗

教育部長、教育委員会事務局理事、教育総務課長、教育総務課企画管理係長、学校教育課長、学校教育課担当課長、生涯学習課長、学校給食センター所長、中央公民館担当次長、図書館長、市長公室長、市長公室企画政策監、経営戦略課長、経営戦略課行政経営係長

■開会　大橋市長挨拶

本日は、令和８年度第１回福知山市総合教育会議に大変ご多忙の中、ご出席をいただき、誠にありがとうございます。

廣田教育長をはじめ、教育委員の皆様には、日頃から本市教育の充実とこどもたちの健やかな成長のために、多大なるご尽力をいただき、心から御礼申し上げる。

さて、現行の福知山市教育大綱では「自分のために　人のために　社会のために　共に幸せを生きる人材の育成」を教育目標に掲げ、「教育のまち福知山」の実現に向けて、学校、家庭、地域をはじめ、多くの皆様とともに取組を進めてきた。

この間、2020 年度から 2026 年度にかけて、少子化や人口減少、生成ＡＩをはじめとするデジタル技術の進展、価値観や学びのあり方の多様化など、教育を取り巻く環境は大きく変化している。加えて、不登校や特別な支援を必要とするこどもへの対応など、一人ひとりの状況に応じた対応も求められている。

このような中、社会や教育を取り巻く変化をしっかりと捉え、これまでの取組の成果を次につなげるとともに、今後の課題に向き合っていくことが重要である。

今年度は、現行の教育大綱が計画最終年度を迎え、次期教育大綱を策定する重要な年である。

本日の会議では、限られた時間ではあるが、これまで大切にしてきた「教育のまち福知山」の精神を受け継ぎながら、これからの福知山における教育において何を大切にしていくのか、教育委員の皆様と幅広く意見交換をさせていただきたい。

本日の意見交換が、これからの福知山の教育をともに考え、次期教育大綱の策定につながる機会となることを期待し、開会の挨拶とする。

■報告事項

「福知山市立学校の教育職員に関する業務量管理・健康確保措置実施計画について」

担当課(学校教育課)より、資料に沿って説明

織田委員

目標数値について、民間の企業経営者という立場から 2 点伺いたい。まず、ストレスチェックの受検率が令和 6 年度から令和 7 年度にかけて減少している。減少している理由として、職員が受検を拒否しているのか、あるいは回答を回収できていないのか、その要因をお聞きしたい。

また、資料中の「(3) 教育職員の健康及び福祉の確保」に、「時間外在校等時間が 80 時間を超えた教育職員に対して本人が希望した場合は、医師による面接指導を実施する。」と記載がある。しかし、本人の希望に関わらず、担当部署から医師との面談を促すなど、より積極的に対応すべきと考えるが、その点についてお聞きしたい。

学校教育課

ストレスチェックについては、各学校に一斉に受検を依頼しているが、催促や声かけをしなければ受検しない教育職員が一定数いる状況である。

今年度については、昨年度に受検率が低下したことも踏まえ、各学校の教頭先生を中心に積極的な声かけをお願いした。その結果、受検率は 97%程度まで回復しており、周囲からの意識づけが重要である。

また、時間外在校等時間が 80 時間を超えた場合の対応については、本人の希望を原則としているが、忙しいことを理由に面談を希望されない教育職員も想定される。そのため、本人の希望だけではなく、学校からの状況を聞き取りながら、必要に応じてこちらから声をかけていくことも必要である。

■協議事項

意見交換

テーマ「次期福知山市教育大綱の策定について」

市長

教育大綱については、法律に基づき、総合教育会議において協議し、策定することとなっている。

現行の教育大綱は、令和 4 年度から令和 8 年度までを計画期間としており、「まちづくり構想 福知山」と連動させながら、「自分のために　人のために　社会のために　共に幸せを生きる人材の育成」を教育目標に掲げ、取組を進めてきた。

この５年間、教育委員の皆様をはじめ、学校、家庭、地域、関係団体など、多くの皆様に御尽力をいただきながら、「教育のまち福知山」の実現に向けて取組を重ねてきた。

「まちづくり構想 福知山」の成果検証では、これまでの取組による成果が見られる一方で、今後取り組むべき課題も明らかになってきている。

学校教育では、児童生徒１人１台端末をはじめとするICT環境を整備するとともに、家庭、学校、地域の連携を進めてきた。また、多様な教育ニーズに対して、教育と福祉が連携し、居場所づくりや学びを支える取組を進めてきた。一方で、基礎学力の定着、多様な教育ニーズへの対応、教職員の負担軽減など、引き続き取り組むべき課題も多くある。

高等教育では、福知山公立大学が地域のための大学として教育・研究に取り組み、地域課題の解決に向けた研究や地域との連携を進めていただいた。一方で、進学や就職を機に市外へ転出する若者が多い中、若者と地域との接点を広げ、福知山で学び、挑戦し、活躍できる機会を充実させる必要がある。また、大学の知見や研究成果を地域課題の解決や地域の活性化に一層生かすとともに、若者が将来にわたって福知山と関わり続けられる環境を整えていくことが重要である。

社会教育では、公民館や図書館などを通じて、こどもから高齢者まで、それぞれの世代に応じた学びの機会を提供してきた。一方で、学びの成果を地域活動に生かすことには、なお課題が残っている。

文化芸術、文化財、スポーツの各分野においても、市民や地域の皆様とともに取組を進めてきた。文化財に対する認知度やスポーツへの関わりなどに一定の成果が確認される一方で、文化芸術活動への参加については、なお課題が残っている。

人権教育については、一人ひとりの尊厳を大切にする意識の醸成に向け、教育啓発に取り組んできた。人権を重んじて行動する市民の割合に一定の成果が見られる一方、今なお様々な人権課題が存在している。また、令和８年４月に施行した「福知山市インターネット上の誹謗中傷や差別等の防止及び被害者支援等に関する条例」の趣旨も踏まえ、引き続き教育啓発と相談支援を一体的に進めていく必要がある。

さらに、学校教育に限らず、地域の学びや文化・スポーツ活動を支える人材の高齢化や不足も課題となっており、担い手の確保・育成と次世代への継承が今後一層重要になる。

こうした成果を次につなぎ、残された課題に向き合うことが、次期教育大綱の出発点である。この５年間は、教育を取り巻く社会環境が、これまで以上の速さで大きく変化した期間であった。

先月、国の教育振興基本計画について、令和10年度からの第５期計画に向けた諮問が行われた。その中では、これからの時代はVUCAに加えてBANIの時代と指摘されるように、激しい変化がとどまることのない時代をこどもたちが生きていくことが前提とされている。また、想定を上回る人口減少と少子高齢化が進み、こどもの数が減少する一方で、家庭環境や学びのニーズは多様化している。学校や園のあり方をはじめ、こどもがどこに暮らしていても、必要な教育や支援を受けられる環境を将来にわたってどのように維持していくのかが問われている。

生成AIについても、使わない、接することもないという時代ではなくなっており、こどもたちも含め、こうした時代をどう生きていくのかという課題がある。デジタル技術が社会や働き方、学び方を急速に変えている中、新しい技術を効果的に活用する力を育むとともに、情報を正しく読み解き、自ら考え判断し、責任を持って行動する力を育むことが重要となっている。

また、グローバル化が進み、人々の価値観や生活のあり方が多様化する中で、異なる考え方や立場を理解し、対話を通じて互いを認め合いながら、ともに課題を解決していく力を育むことが、これまで以上に求められている。探究的な学習や文理横断的な学習、実践的な学び、留学などの越境的な体験も、今後さらに求められていく。

不登校の児童生徒や特別な支援を必要とするこどもの増加、外国人児童生徒を含む在留外国人の増加に加え、家庭環境や社会的背景に起因する困難など、課題が複合的に重なる場合もあり、教育、福祉、医療などの関係機関が連携し、一人ひとりに応じて切れ目なく支えていくことが必要である。

こうした中、ウェルビーイングの向上についても、教育振興基本計画のなかで言われてきた。また、2030年以降のポストSDGsを見据え、SWGsという概念が議論されているところであり、今後は、教育を通じて調和と協調を重視していくことも求められていく。

こうした変化に柔軟に対応しながら、これまで培ってきた「教育のまち福知山」の精神を継承し、さらに発展させることが、今回の大綱の重要な役割である。教育は人を育み、人が地域をつくる。そして、その積み重ねが福知山の未来をつくるものである。

これからの福知山には、一人ひとりの尊厳と可能性を大切にし、こども・若者が自ら考え、多様な人々と協働し、失敗を恐れず、何度でも挑戦しながら、未来を切り拓くことのできる教育が必要である。

同時に、教育や学びは学校だけで完結するものではなく、家庭、園、学校、地域、企業、各種団体、行政がつながり、まち全体でこども・若者の育ちと学びを切れ目なく支えていく必要がある。

また、こどもや若者だけではなく、働く世代や高齢者を含むすべての市民が、生涯にわたって学び続け、その成果を自己実現や生きがいづくり、地域課題の解決に生かすことのできる環境を整えることが重要である。

さらに、福知山は2028年に築城450年を迎える。福知山の歴史や文化、スポーツ、自然などの魅力を市民の皆様とともに学び、守り、地域づくりに生かすことで、福知山への愛着と誇りを育み、次の世代につないでいきたい。

こうした考えから、次期教育大綱では、「①一人ひとりの尊厳と可能性を大切にする」「②こども・若者の育ち、学び、挑戦を切れ目なく支える」「③生涯にわたる学びと地域参加を広げる」「④ふるさと福知山への愛着と誇りを育み、未来につなぐ」の４つを基本方針として整理している。

この４つの基本方針は、それぞれが独立したものではなく、学校教育、社会教育、人権教育、文化芸術、文化財、スポーツなど、すべての教育分野に共通する方向性であり、それぞ

れが関係し、連携するものである。
次期教育大綱においても、現行の教育目標を受け継ぎながら、社会の変化や新たな教育課題に応え、市民一人ひとりの学びと挑戦が福知山の未来をつくる教育を進めていきたい。

担当課(経営戦略課)より、資料に沿って説明

市長

教育を取り巻く環境が大きく変化する中で、これまで大切にしてきた考え方を踏まえながら、これからの教育の方向性について整理していく必要がある。
本日は、次期教育大綱の方向性について、認識を共有するとともに、これからの「教育のまち福知山」において何を大切にすべきか、皆様から御意見をいただきたい。

塩見委員

福知山市は、市民憲章に掲げる「共に幸せを生きる」の具現化を目指し、様々な施策を展開されてきた。本市の合計特殊出生率は近畿地区で 3 位、府内で 2 位という高水準を維持している。約半世紀にわたり受け継がれてきた、家庭と地域社会が響き合いながら、ともにこどもたちを健やかに育てていく精神は、「教育のまち福知山」に息づいている。
人と人との世代を超えたコミュニティの中で育まれる精神は、独自の文化や風土、そこに息づく温かな記憶を受け継ぎ、未来へとつながっていく。このつながりを維持しようとする営みは、個々のアイデンティティの確立と、ふるさと福知山を誇りに思う人材を育むものである。また、自分のルーツを愛することは、他者を尊重する第一歩となると考えており、ふるさと福知山を誇りに思い、心の居場所とできるような取組を推進することが重要である。
今後の方向性としては、次期教育大綱の 4 つの基本方針を土台として、各分野において多様な主体や人々との協働による取組を推進し、切れ目のない支援を図っていくことが必要である。
その上で、何を大切にすべきか、という点について、取組や活動の推進にはマンパワーが欠かせない。昨年度の公民館活動の中で、特に心に残っている取組は、桃映地域公民館を会場とした防災学習である。社会教育委員、福知山公立大学生、中学生、民生児童委員、地域の方々などが協働しながら、生き生きと活動されている姿が大変頼もしく感じられた。他の地域でもこのような取組が行われることを願っている。
また、部活動の地域展開をはじめ、校種間連携などの取組も進められているが、さらなる充実を図るためには、福知山ユナイテッドのような組織づくりへの支援も大切である。
福知山ユナイテッドは、スポーツを「する・みる・支える」などの観点から、様々な関係機関や団体とつながり、スポーツを核としたまちの文化づくりを推進されている。
本市には、様々な団体や関係機関があり、連携や融合を図りながら、多様な取組や活動を進めておられる。それぞれの団体には、企画運営を担うリーダーやスタッフがおられるが、今後さらなる充実・発展を図るためには、人材の発掘や育成が必要である。

福知山公立大学のさらなる活躍にも期待しているところであり、今後ますます、人材の発掘や育成に対しても切れ目のない支援を行っていく必要がある。

市長

部活動をはじめスポーツを核とした文化づくりなど、いずれの取組を進める上でも人材の確保が重要であり、人材をいかに発掘し、育成していくかということは非常に大切である。

本市のデジタルパークでも、デジタル技術をテーマとしたイベントとしながら、出展事業者や来場者、地域の企業の皆様が直接顔を合わせ、交流する機会を大切にしている。こうした人と人とのつながりが非常に重要であり、そのためにも人材の発掘や育成が欠かせない。

今後、次期教育大綱を策定し、新たな教育の方向性を見いだしていく中でも、大切にしていく必要がある。

織田委員

令和 4 年度から令和 8 年度までを振り返ると、コロナ禍もあり、社会が劇的に変化を遂げてきた期間であった。

そうした中、教育現場においては、児童生徒 1 人 1 台端末をはじめとする ICT 教育が順次浸透しつつある。一方で、ICT・IT リテラシーやネットリテラシーなど、読み書き能力や特定の分野に関する知識、それらを活用する能力といった基礎基本の学習を身につけることが必要であり、こどもや学生だけでなく、すべての世代に求められる時代になってきた。

特に、デジタル技術の進展や様々な技術革新については、大人でも対応が追いついていない状況にある。私自身、企業を経営する立場から、一定のルールを定め、それを守り、必要に応じて臨機応変に見直し、その内容を徹底していくことが重要である。また、PDCA の流れに沿って取組を進めるとともに、個人情報などのプライバシーを侵害することなく、セキュリティを強化・管理しながら対応していかなければならない。

そのためには、基礎基本を身につけるだけでなく、なぜそのようなルールや対応が必要なのかという本質的な部分を理解しておくことが大切である。そうした理解がなければ、AI の利用についても、誤った方向に進んでしまう可能性がある。また、人々の価値観の違いや多様性が当たり前となっている中で、熟議や意見交換、相談を繰り返すことにより、互いに学び、考えを深め、同じ方向を向いて行動していくことが重要であり、こうした姿勢を大切にしていく必要がある。

AI についても、AI が示した心地よい回答を鵜呑みにし、自ら判断することなく AI に委ねてしまうような受動的な姿勢になることは望ましくない。

今後 5 年間の教育を考える上では、これまで積み重ねてきたものを大切にしながら、新しい良いものも取り入れ、社会の変化に対応していくことが必要である。

市長

これから、さらに先を見通すことが難しく、不可解で理解しづらい時代になる。

そうした中で、原則に立ち戻り、なぜこのような取組が必要なのかということも含めて、改めて見直していく必要がある。

こどもたちにネットリテラシーの重要性を伝えることは難しく、どこまで、どのように対応していくのか、十分に考えていく必要がある。また、議論することについて、今のこどもたちは苦手ではないかと感じている。生成 AI とのやり取りの中で、自分の考えを肯定する方向に偏ってしまうことに危惧している。実際の社会では、自分とは異なる意見や価値観を持つ人がいる。その違いを認め合うことから始めなければ、人としての成長や社会の中で生きていく力にはつながっていかない。

こうした時代だからこそ、原則に立ち戻り、異なる意見を持つ人とも議論を重ねていくことが、人を育て、育むことにつながるという視点を大切にする必要がある。

大門委員

現在の教育を取り巻く環境は非常に急速に変化しており、同時に、多様なニーズへの対応が求められている。

特に、生成 AI など様々な業務の自動化が進んでいる。また、大学教員として学生と接する中で、最近は「タイパ」、つまり、短い時間でいかに効率よく良いものを得られるかを大切にするという話をよく聞く。急速に社会が変化する中で、いかに対応していくかということが、こどもたちにとっても大切な価値観の一つになってきている。

一方で、障害のあるこどもや発達上の特性をもつこども、不登校などにより通常の学校生活になじみにくいこども、学習に時間を要するこどもがいる一方で、理解や学習の進度が速く、通常の授業では物足りなさを感じるこどももいる。こどもたち一人一人の状況に合わせた、いわばオーダーメードの教育も必要である。福知山においても、特別支援教育、けやき広場、SIRO らぼなどの取組が進められているが、多様化するニーズに、どのように対応していくかが求められている。

このように考えると、教育には、社会の変化にも、こどもたち一人一人の違いにも対応することが求められており、今後ますます「変えること」が増えていく。そうした中、逆説的ではあるが、今後は「何を変えないのか」についても議論すべきである。教育現場の先生方にとって、急速な社会の変化に加え、多様なこどもたちへの対応も求められる中では、目の前の業務に精一杯となり、今後 5 年間で何を目指していくべきかという方向性が失われてしまうことを危惧している。時代が急速に変化し、多様な課題への対応が求められるからこそ、変わらないこと、変えないことを考えていく必要がある。

大学での研究活動の中で、被災地を訪れる機会が多い。防災において、自分の身を守る「自助」の観点はもちろん大切であるが、他の地域で災害が発生した際に、被災地で困っている人たちに思いを寄せ、時には手を差し伸べることのできる「共助」の気持ちが育つまちであってほしい。そのようなまちであれば、将来、本市で災害が発生した際にも、周囲から手を差し伸べてもらえるまちになっていく。

本市の教育目標には、「自分のために」ということに加え、「人のために　社会のために」

ということも掲げられている。こどもたちが「このまちで育ってよかった」と思える環境を充実させるためにも、自分自身を大切にするとともに、相手のことも思いやる教育を実現していただきたい。

市長

変化の激しい時代だからこそ、何を大切にしていくのか、不易なものは何かを考える必要がある。

今回の次期教育大綱の方向性を議論する中でも、これまで取り組んできたことを改めて振り返り、その中で大切にしてきたものを次の５年間にも引き継ぎ、継続していくということを基本に置いている。また、防災において、公助だけですべてに対応することは難しく、自助・共助の重要性を考える必要がある。

お互いを認め合い、助け合い、支え合っていくことは、不易の話にも通じるものであり、こうした考え方は、今後も本市としてしっかりと守り、大切にしていきたい。

小林委員

これからは未来につながる教育をより大切にしていくべきだと改めて感じている。福知山は長い歴史と豊かな文化を持つ素晴らしいまちであり、その歴史を大切にしながら教育を積み重ね、現在の「教育のまち福知山」が築かれてきた。これまでの積み重ねを大切にすることは、今後も変わらず必要である。

一方で、教育委員との意見交換の中で出た「未来につながる教育大綱」という言葉に胸を打たれた。こどもたちがこれからの時代を自分らしく生きていくためには、これまでの正解を学ぶだけではなく、自分で考え、未来を描き、その未来に向かって一歩を踏み出す力を育むことが非常に重要である。

そのためには、こどもたちがやってみたいと思ったことに積極的に挑戦し、たとえ失敗したり、思いどおりにならなかったりしても、そこから学び、何度でも挑戦できる教育が、実際に浸透することを願っている。これからの「教育のまち福知山」において、一人ひとりの多様な生き方や挑戦を認め合うことを大切にしたい。

現在は、セカンドキャリアやサードキャリアなど、人生の途中で新しい道に挑戦することも当たり前の時代になってきている。一度決めた道を最後まで続けることが正しい、あるいは、この年齢から新しいことを始めるのは難しいといった、固定観念に囚われすぎないことが大切である。多様性という言葉が使われるようになって久しく、様々な考え方や思いを持つ人がいることは、誰もが理解していると思う。しかし、実際には、これまでとは異なる考え方や生き方を受け入れることに、まだまだ抵抗を感じる方も多いように思う。アンコンシャス・バイアス、いわゆる無意識の思い込みが、気づかないところに数多くあり、自分自身ではなかなか気づくことが難しい。一つの答えを示すのではなく、自分はどうしたいのか、どのような未来を生きたいのかということを大切にしてほしい。

また、こどもたちだけでなく、大人についても同様である。何歳からでも学び直し、新し

いことに挑戦できること、人生の途中で進む道を変えてもよいことなど、多様な生き方をお互いに認め、応援できる地域であることが、「教育のまち福知山」にとって大切である。

新たな教育大綱の策定にあたり、その内容を文章としてまとめるだけで終わらせず、実際の取組につなげることが重要である。市民全体で共有し、一人ひとりが教育大綱に掲げる考え方を意識しながら、実践に向けて努力していけるまちになることが大切である。

文章としてまとめるだけでは、実際に浸透するまでに時間がかかり、意識しなければなかなか広がっていかない。そのため、教育大綱を策定した後、どのように市民全体に浸透させ、実践につなげていくかについても、今後考えていく必要がある。

市長

こどもたちにも、成功や失敗をあまり意識せず、自分がやってみたいと思ったことに挑戦してもらいたいし、そのような挑戦ができるまちになっていく必要がある。また、「未来につながる」という言葉も、非常に大切な視点である。今、一生懸命に教育について考え、こどもたちを育んでいくことが、10 年後にどのような形で残り、現れ、さらにその先の未来へとつながっていくのかという視点は、非常に重要である。

さらに、多様性については、様々な場面で使われる言葉であるが、これからの社会において非常に大切にしていかなければならない考え方である。

一人ひとりが、自分なりの個性を生かし、様々なことに挑戦しながら、自らの意思を持って人生を歩んでいく。そのような生き方を大切にしていく必要がある。

織田委員

多様な教育的ニーズに対応するため、今後、様々な施策を講じていく必要がある。次期教育大綱にもあるように、基本方針に基づき、それぞれの取組を相互に関連させながら進めていくことが重要である。

そうした中で、大人が児童生徒やこどもたちに手本を示しながら、若者と地域との接点を広げ、福知山で学び、挑戦し、活躍できる機会を充実させる必要がある。

また、福知山公立大学の知見や研究成果を地域課題の解決や地域の活性化に生かすとともに、若者が将来にわたって福知山と関わり続けられる環境を整えることが重要である。

最終的に「福知山で学べてよかった、生活できてよかった」、そして「将来も福知山で生活し、生涯を終えたい」と思えるような、人生を通じて学びを得られるまちになってほしい。

そのためには、家庭、園、学校、地域、企業、各種団体、関係機関等が連携し、様々なテーマや課題について、常にコミュニケーションを図ることのできる体制を構築していく必要がある。人口減少が進む中、私自身、教育委員を務める一方で、企業を経営する立場としては、地元に残って頑張り、地域に貢献していただける人材を求めている。

その意味でも、教育大綱に掲げられている郷土愛を大切にしながら、ふるさと福知山への愛着と誇りを育み、未来につなげていくための努力を重ねていくべきである。

市長

人口減少が非常に急速に進む中で、社会や産業界の立場からすると、いかに人材を確保していくかということは、極めて大きな課題である。

本人の意思に反してということではなく、そうした人材をどのように育成していくのかを考える必要がある。また、福知山に誇りを持ち、ここで生きていきたい、暮らしていきたいと思ってもらえる人を、いかに育んでいくかということにもつながってくる。

産業分野だけでなく、エッセンシャルワーカーの確保についても、非常に厳しい状況になってきている中で、産業界や社会全体を通じて、どのように人材を育成し、様々な職業に就いてもらうのかを考えていく必要がある。

塩見委員

本日の総合教育会議は、大変素晴らしい時間であった。

それぞれが考えてきたことをこの場でお話しするとともに、私自身も、他の委員の皆様の考えや市長のお話を聞かせていただき、大変有意義な時間となった。

先ほど市長もおっしゃったように、顔と顔を合わせて話を深めていくことは、非常に素晴らしいことであると改めて感じた。本日の熟議の機会を設けていただいたことに感謝申し上げるとともに、今後ともよろしくお願いしたい。

市長

本日は、様々なお話を伺い、意見交換をさせていただいた。これからの「教育のまち福知山」において、何を大切にしていくべきか、ということについて、皆様と考えを共有できた。

本日いただいた御意見を踏まえ、教育委員会とも十分に連携しながら、次期教育大綱の策定を進めてまいりたい。

それでは、本日予定していた協議及び議事は以上となる。引き続き、理事者間の協議や、市長部局と教育委員会事務局との相互の連携を密にしながら、対応していきたい。

■閉会　廣田教育長挨拶

本日は、次期教育大綱の策定をテーマに、熱心に御協議いただいた。

協議に先立ち、今年度から総合教育会議で報告することとなった「福知山市立学校の教育職員に関する業務量管理・健康確保措置実施計画」について説明させていただいた。教育職員の働き方改革については、これまでも取り組んできたところであるが、引き続き、現場の状況を把握し、意見を聞きながら進めていくため、御協力をお願いしたい。

次期教育大綱の策定に向けては、まず市長のお考えをお聞かせいただき、その後、各委員から活発に御意見をいただいた。まさに熟議と呼べるものであったと思う。

今後は、本日の議論をもとに、教育の方向性や大切にすべきことを中心として、次期まちづくり構想との整合を図りながら、これからの本市教育の推進の土台となる教育大綱について、さらに検討を重ねていくこととなる。

御存じのように、現在、国では次期学習指導要領の改訂に向けた作業が大詰めを迎えている。9 月 25 日には、最終段階として審議のまとめ案が議論され、年度内には答申が出される予定であり、次期教育大綱についても、関連を図っていく必要がある。

誰一人取り残さず、一人ひとりの可能性を伸ばす教育、主体的に考え、他者と協働して社会や地域の課題に向き合う教育、地域・家庭・学校等が連携し、変化する社会に対応できる学びを支える教育といった根幹部分については、同じ方向性である。

「まちづくりは人づくり」という言葉があるが、社会が目まぐるしく変化する時代において、正解を求めて対立するのではなく、より多くの合意を生み出していく社会こそが、一人ひとりの豊かな生活や、幸せを生きることにつながっていく。教育は、その中心的な役割を担うものである。

「教育のまち福知山」として、これまでの歴史を大切にしながらも、ますます予測困難となるこれからの時代に、新たな一歩を踏み出す土台となる、そして、本日の議論でも繰り返し出てきた「未来につながる教育大綱」となるよう、市民の御意見等も踏まえ、引き続き検討を重ねていただくことをお願いし、閉会の挨拶とする。

以上